

資料 18.文献 73)浄書版『ナイロン・ザイル事件』

資料番号	年月日	種別	入手経路
14	昭和 30.1.8	文書	同行者の遭難報告並びに遭難直後の岩稜会の見解

遭難報告書（昭和 30 年 1 月 2 日前穂高岳東壁における登山者墜死事件）作製のいきさつ

この報告書は遭難の報をうけてかけつけた友人遺族によって、1 月 7 日、8 日の両日にわたり上高地で製作されたものである。1 月 6 日、毎日新聞運動部長、竹節作太氏の遭難原因に関する記事が発表されたが、実情とほど遠いものがあると考えられたので遭難当事者の見解を早急に発表することは、登山者の安全にとって是非必要なことと考えた。このため報告書数部を作製し、松本において、朝日新聞、その他に電話し手交しようとしたが、実際に手交出れたのは信濃毎日新聞だけであったと記憶する。その折、信濃毎日新聞ではザイル切断部分等の写真等をとった（これが実際に新聞に掲載されたかどうかは知らない）。名古屋に帰って後、中部日本新聞に送った。この大要が 1 月 11 日、12 日の『中部日本新聞』に掲載された（「二つの遭難とナイロンザイル」）。なお原文をガリバン印刷し、関係ある岳人若干名に送った。

山岳雑誌「山と溪谷」社には熊沢友三郎氏から、前記『中部日本新聞』の記事が送られ、同社は同誌にその転載方を石岡に依頼した。石岡は前記ガリバン印刷のものを送った（『山と溪谷』189 号、昭和 30 年 3 月号、「二つの遭難とナイロンザイル」）。その後、山岳雑誌「岳人」社からも転載を依頼されたので、ガリバン刷りのものに若干の追記を行って「岳人」社に送った。（『岳人』83 号、昭和 30 年 3 月号、「世にも不思議な出来事」）以下記す報告書はガリバン刷りそのものである。

遭難報告書

私は本年 1 月 2 日前穂高岳の東壁に於いて発生した遭難事故の責任者であります。社会の皆様をお騒がせしましたことを衷心からお詫び申し上げると共に、遭難事故は理由はどの様であろうとも、岩登りの健全な発展を著しく^{そがい}阻碍するものであると考えられますので、私達も技術の科学的な究明と、安全ということについては、全く慎重にのぞんでいたつもりであり、かつ、私達岩登り生活 20 年間を通じ全く無事故を通して来たものでありまして、今回の事故は全く^{ざんき}慚愧の念に堪えません。敗れた私が次の様なことを申し上げるのは誠に^{ひきよう}卑怯であり、かつ、愛する肉親を失った衝撃が、私

の乏しい理性を一層低下せしめているのではないかとおそれるものでありますが、今や岳人の間に絶対の信頼をもたれつつあるナイロン・ザイルが切断したということが事件の直接の原因でありますので、ザイル切断に関する資料と、それについての感想を申し述べることは、ザイルの改良、すなわち、岩登りの発展のための私に課せられた当然の義務ではないかと考え、拙^{つたな}い筆をとった次第であります。

1. ザイル購入の事情

名古屋在住の著名登山家であり、今回初めて登山用ナイロン製品の販売を始められたK氏が、昨年11月中頃、私の所に来られ、ナイロン製ザイルの見本数種、同じく布地十数種及びTレイヨンの布地によるオーバー手袋を持参せられ、それに関する豊富な資料を提示された。それによると、

(イ) 製品はTレイヨンの原糸を使用してT製綱に於いて製綱せるものである。現在の研究段階は従来のナイロン・ザイルより約2割強力なザイルが完成し(強力糸と言われました)これによれば、この8mmザイルは抗張力については従来のマニラ麻11mm(私達は従来これのスイス製品をよく使いました)に匹敵する。したがって岩登りの安全性に対して最も大切な衝撃に対しては、約3倍の強さを有するであろう。

(註) (もし提示された抗張力を表す数字が正しければ、マニラ麻ザイルの伸びは最大抗張力の場合に10~15%、ナイロン・ザイルは55%であるから、ナイロン・ザイルは理論上、衝撃に対して3倍強いことになる)

(ロ) 寒さに対しては大丈夫である。すでにマナスル登山、南氷洋の捕鯨に使用している。ただナイロンの繊維の間に水が入って凍った状態の場合、すなわちガリガリの状態の場合のテストは行われていないから、この状態については何ともいえない。したがってこの場合について名古屋大学でテストをしてほしい(この点、須賀太郎教授と話し合っ^{もっ}てテストの方法等について意見の一致を見たのではあるが、入山の期日が近迫し、テストできなかった。尤もザイル切断の場合はこの状態ではなかった)。

(ハ) ナイロンは紫外線に弱いと言われているが、これは表面を着色することによって防止できるのではないかと思う。いずれにしても着色すれば判別に容易だから、着色してはどうかと言う意見に基づき、オレンジ着色した。